

本市におけるゴケグモ緊急対策

■伊澤三彩・金山彰宏

平成七年十一月、大阪で多数のセアカゴケグモの生息が確認されたことから「毒グモ」騒動が始まった。

発見当初、このクモに関する情報がきわめて少なく、「猛毒を持ち、かまれると死ぬこともある」との情報が流れ、マスコミなどもセンセーショナルに「毒グモ」報道をし、国民に大きな不安を与えた。このような不確定な情報の中で行われた本市の対応について報告する。

事件の発端

―セアカゴケグモ発見

十一月二十一日、日本クモ学会会員らにより、「十九日に大阪府高石市で、これまで日本に生息しない神経毒を有するセア

カゴケグモを発見・捕獲した」と、大阪府に報告があった。

報告を受けた大阪府は、応急対策として、府下全域の調査と薬剤駆除、血清の緊急輸入、毒性調査、府民への広報・啓発などを実施した。

本市の対応

① 生息実態調査

このクモは、主に熱帯から亜熱帯地域に広く分布し、輸入貨物などとともに、日本に入り込んだのではないかと推測され、横浜でも生息の可能性が疑われた。

そこで、港湾施設、公園・墓地等、侵入していれば生息の可能性が高い場所を対象に、十一月二十七日、港湾地区に接する

各区の保健所は実態調査を開始した。

翌二十八日、厚生省横浜検疫所、港湾局と連絡調整会議を開催。港湾施設内の調査は、ふ頭の特徴や貨物の輸出国、種類等詳しい情報をもつ港湾局と保健所が合同で実施することとし、調査対象を市内全域へと拡大した。

② 職員派遣による情報収集

また、十一月三十日に衛生局職員を大阪府堺市に派遣し、調査手法と結果、広報内容等の情報の収集・標本の入手を行い、週明け早々の十二月四日には、保健所等関係事業所の職員を対

象に説明会を開いた。

③ 市民対応

一方で、セアカゴケグモの生態や特徴を記載したチラシを作成し、各区保健所に備え付け、相談受付窓口を衛生課環境衛生係とした。また、市民から持ち込まれるクモの同定は衛生研究所で行うこととするなど、国内最初の生息確認報道から五日間で相談体制を整備した。

その後の動き

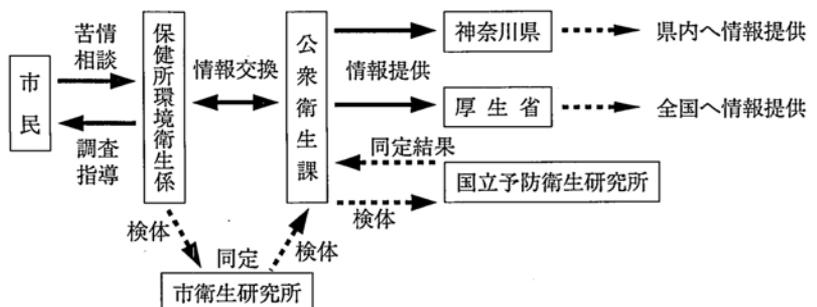
大阪府は十二月五日、毒性試験の結果、今回捕獲されたセアカゴケグモの毒性は比較的弱く、かまれても重症になることはないと発表した。

一方、県下では、十二月八日

セアカゴケグモ生息調査

調査箇所数	発見匹数
11月27日 から 12月1日	271カ所 0匹

図-1 セアカゴケグモ対応の体制



に、神奈川県、川崎市、横須賀市、横浜市の間で「セアカゴケグモ対策連絡調整会議」を開催。今後の対応等を検討し、クモが発見された場合の統一的な体制整備を図った。(図-1)

第二の事件

ハイイロゴケグモの発見

本市の調査ではセアカゴケグモは発見されず、また、関係機関からも発見の連絡がないため、事件は終息するかに見えた。ところが、十二月十四日、横浜市内において、セアカゴケグモに近い種類のハイイロゴケグモがわが国で初めて発見されたとの新聞報道があった。

これは、一連のセアカゴケグモの調査時に、厚生省横浜検疫所員が本牧ふ頭で見慣れないクモを捕獲し、同定を依頼していたものである。

そのため、従来の「調整会議」を拡大し、緊急に港湾局、港湾地区に接する区保健所、厚生省横浜検疫所、横浜税関等関係機関の参加を得て、対応について協議した。協議の結果を受け、今回発見された本牧ふ頭を中心に市内全域の即日実態調査を開始した。また、県域においても

同時に調査を行った。

その結果、本牧ふ頭で見慣れないクモを六十三匹捕獲。そのうちハイイロゴケグモの特徴をもつ五匹を国立予防衛生研究所に送付した。翌日ハイイロゴケグモと同定された。

発見場所周辺は市民利用施設であることから、注意を呼びかけるポスターを作成・掲示するとともに、区役所や関係局(港湾・教育・緑政等)に、リーフレット(図-2)を配布した。

毒性試験とクモの毒性について

横浜市、神奈川県(両衛生研究所)が共同でハイイロゴケグモの毒性試験を実施した。

試験の結果、一匹分の毒はマウス一頭を致死させるが、十分の一の毒量ではマウスに異常を認めないことが分かった。ハイイロゴケグモの人に対する毒性は、セアカゴケグモと同程度に弱いものであると推定された。

セアカゴケグモの時はもちろんのこと、ハイイロゴケグモの場合にもマスキミは「毒グモ」「猛毒のクモ」の言葉を盛んに使用した。

しかし、一般にクモはすべて

の種が毒腺(どくせん)を有し、強弱の差はあるものの、みな毒を持つのだ、という視点が欠けていたように思う。むしろ毒性の強さで言えば、以前から日本に生息しているカバキコマチグモの方がまさる。(注)

今後の対応

ハイイロゴケグモは攻撃性がなく、かまれた報告もほとんどない。毒性の弱さ、発見場所が限定されていることから、薬剤等による駆除は、環境や生態系に与える影響の方が大きいため行わず、ポスター・リーフレットにより市民に注意を呼びかけていくことにした。

しかし、クモの毒性は季節により変化するとの指摘もあり、今後も引き続き実態調査を行う。昆虫等が活発に活動しだす春以降に、再度、港湾局等関係機関と連携し、市内一斉に生息調査を実施し、その結果により対応を検討していく予定である。

おわりに

今回の「毒グモ上陸」という初めて直面する危機にあたり、我々は正確な情報を収集し、関

係機関との連携を図り、また、日常の衛生害虫等の相談業務の経験を生かし、市民の不安に対応して実態調査や広報など迅速に対応することができた。今後も、日ごろからの連絡調整を密にし、市民のニーズに即座に対応できる体制を整備していきたい。
△伊澤Ⅱ衛生局公衆衛生課環境衛生係/金山Ⅱ同局衛生研究所細菌課V

ハイイロゴケグモ生息調査

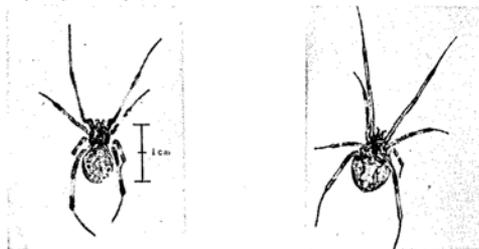
	調査箇所数	発見匹数
12月14日	19カ所	63匹
12月15日	76カ所	8匹

注 カバキコマチグモにかまれると、激しい痛みをきたし、重症例では、頭痛、嘔吐、ショック症状などの全身症状が見られる。夏には、人家内に侵入することもあり被害も多い。

図-2 配布したリーフレット
ハイイロゴケグモにご注意

横浜市内において、今まで国内では見られなかった「ハイイロゴケグモ」が発見されました。このクモは主に熱帯地方で生息していますが、輸入貨物と共に日本に入ってきたものと考えられています。このクモは毒を持っていると言われておりますので、素手でさわらないよう十分に注意して下さい。万一、咬まれた場合は、水で洗い、患部を清潔にし、直ちに保健所にご相談ください。
【ハイイロゴケグモの特徴】
体長 約1cm 背面は灰色から黒色で、斑紋があります。腹の部分に砂時計型の赤い色の模様があります

【生息場所】
土砂のたまった排水溝やマンホールのふたの裏側、石積み回りの窪みの穴



(背面) 問い合わせ先
最寄りの各区保健所環境衛生係
電話
横浜市衛生局